

『ONE PIECE』と『宝島』

新 居 明 子

はじめに

海賊による海賊行為は、何も9、10世紀のヴァイキングの時代や17、18世紀のカリブ海における海賊の黄金時代等の過去に限ったことではない。海賊行為は海洋法に関する国際連合条約第101条において、「私有の船舶又は航空機の乗組員又は旅客が私的目的のために行うすべての不法な暴力行為、抑留又は略奪行為」¹と定義されており、21世紀の現代においても特にマラッカ海峡やソマリア沖の海賊被害は甚大で深刻な国際問題となっている(室伏 92-93)。しかしながら、海賊のイメージについてのアンケートを小学生88名と大学生163名に実施したところ、「財宝」「冒険」等の肯定的なイメージが、「危険」「怖い」といった本来の海賊の姿を示す否定的なイメージよりもはるかに多い結果となった(Appendices 参照)。このように、絶対悪である犯罪者としての海賊が存在する一方で、我々が彼らに対して抱くイメージは、「冒険」「自由」「宝探し」といったロマンや憧れを伴うものであることもまた事実なのである。²

あたかも義賊のように英雄化された海賊のイメージは、特に子供や若者を対象に考える場合、テーマパークのアトラクションや映画、小説だけでなく、本論で扱う人気漫画『ONE PIECE』(1997-)の影響も少なからずあると考えられる。『ONE PIECE』の主人公モンキー・D・ルフィは「麦わらの一味」と呼ばれる仲間と共に、「ひとつなぎの秘宝(ワンピース)」を手に入れて海賊王になるために冒険の旅を続けている。したがって本作品は

「海賊」というモチーフだけでなく、「宝探し」というテーマも内包している。「宝探し」は中世アーサー王ロマンスの聖杯探究からトールキン (J. R. R. Tolkien, 1892-1973) の『ホビットの冒険』(*The Hobbit, or There and Back Again*, 1937) や現代のベストセラー小説にいたるまで、例を挙げれば枚挙に暇がないほど多様な作品において繰り返し用いられているテーマだが、そもそも「海賊」と「宝探し」を組み合わせた作品の起源は、児童文学の古典的冒険小説であるロバート・スティーブンソン (Robert Louis Balfour Stevenson, 1850-1894) の『宝島』(*Treasure Island*, 1883) にあるといえるであろう。

本論では、まず『ONE PIECE』についての概略や先行研究について紹介した後、本作品に見られる児童文学の伝統的特徴との共通点を『宝島』と比較しながら具体的に検討し、さらに両作品の共通点や相違点を考察しながら、『ONE PIECE』の持つ魅力の一端を分析してみたい。

1 『ONE PIECE』について

尾田栄一郎原作の『ONE PIECE』は、1997年より集英社の『週刊少年ジャンプ』で連載されている少年漫画である。2015年9月現在までに発行された単行本第78巻までの累計発行部数は3億2086万冊であり、「世界で最も多く発行された単一作者によるコミックシリーズ」(『朝日新聞』2015年6月16日朝刊)としてギネス世界記録に認定されている。またコミックスのみならず、アニメ、映画、テレビゲーム、グッズ販売等の幅広いメディア展開がなされており、日本のサブカルチャーを代表するコンテンツのひとつである。

このように一種の「社会現象」ともいえるほどの人気作品であるため、その人気の秘密を探ろうと、NHKの『クローズアップ現代』(2011年2月9日)や『朝日新聞』のオピニオン欄(2014年6月13日朝刊)等、様々なマスメディアで取り上げられており、またその人気に比例して関連文献の多さも注目に値する。安藤みゆきは『ONE PIECE』に関連する書物を、作

品のストーリーを分析するもの、作品から生き方を学ぶことをテーマとするもの、作品から時代を読み解くことをテーマとするものという三つのグループに分類している(95)。これらの関連書籍の中には、漫画やアニメの愛好家を対象読者とするものだけでなく、『ONE PIECE』を学術的な研究対象として扱っているものも数多く存在する。例を挙げると、阿部美穂は『モンキー・D・ルフィの「D」はドラッカーだった』において、マネジメントの分野から作品を分析している。また『ルフィの仲間力』の著者である安田雪は、社会学の分野から組織の中における人間関係という視点で作品を論じている。小野田哲弥はマーケティング、平居謙は芸術観光学、そして安藤みゆきは発達心理学という視点から、作品の魅力の分析を試みている。

2 『ONE PIECE』と児童文学

このように、様々な分野から『ONE PIECE』についての考察が行われ、その人気の秘密を分析する試みがなされているが、児童文学という視点からのアプローチはこれまでのところないようである。しかし本作品がテーマとする「冒険」は、児童文学の重要なテーマの一つであり、また先述のように、そもそも「海賊」というモチーフと「宝探し」というテーマは、児童文学の古典作品である『宝島』に起源をもつものである。したがって、本作品を児童文学の視点から論ずることは、その魅力を探る上で意義があると考えられる。

『ONE PIECE』と児童文学作品には多くの共通点が見られる。³ 谷本誠剛は『児童文学とは何か』のなかで、児童文学と呼ばれる作品の基本的要件を、「ハッピーエンド」「自立する主人公」そして「行きてのち帰る物語形式」という三つの点から述べている(58)。それでは『ONE PIECE』においてこれら三点はどのように描かれているのであろうか。以下、『宝島』を児童文学の代表的作品として、『ONE PIECE』と比較しながら順に検討してみたい。

2.1. ハッピーエンド

ハッピーエンドとは、物語が「何らかの不満状況から出発し、やがてその解消とともに『幸福な結末』を迎える」(谷本 59) ことである。例えば『宝島』のエンディングについて言えば、主人公ジムは海賊との戦いに勝ち、旅の目的である大海賊フリントの宝を見つけることに成功し、仲間を数人失いはしたものの彼自身は無事に生還するため、ハッピーエンドと言うことができるであろう。⁴ 一方『ONE PIECE』は現在連載中の作品であるため、本作品がハッピーエンドで終わるか否かは現時点では不明である。しかしながら、第1巻からルフィが「俺は海賊王になりたい」ではなく、「海賊王になる」と繰り返し断言しているため、読者は、ルフィはいずれワンピースを見つけて海賊王になるというハッピーエンドを予期しつつ、その結末に至るまでの冒険を楽しみながら読んでいると考えられる。⁵ したがって、『ONE PIECE』の「ハッピーエンド」に関しては、現段階ではハッピーエンドを前提とした作品とすることができるであろう。

2.2. 自立する主人公

児童文学の二つ目の特徴は、「自立する主人公」である。これは主人公が身近な母親などから自立して活躍するというパターンのことで、児童文学作品における子供の自立願望を実現したものである。幼年文学では主人公が一人で活躍するだけであったのに対し、年齢が進んだ子供を対象とした作品では、主人公は作品を通して人間的に成長したり、子供たちに他者意識や仲間意識が芽生えるため、主人公ひとりが活躍するのではなく仲間としての集団そのものが主人公になることもある(谷本 81, 88)。このように考えると、「自立する主人公」という特徴は、「親の不在」「主人公の成長」そして「仲間の存在」の三つに細分化することができるであろう。

「親の不在」について、『宝島』を例にとれば、ジムの病弱な父は物語の冒頭で死んでしまい何の存在感もない(岩尾 25)。また母親についても、ジムが宝島への旅に出る際に別れを告げた後は、物語には一切登場しない。

つまりジムの両親は物語の冒頭で排除されている、あるいは背景化していると考えられる。⁶『ONE PIECE』においても、ルフィは親不在の少年として描かれている。血縁者としては海賊の敵である海軍に属する祖父がいるものの、いつも留守であったため、ルフィは両親について何も知らされずに野放し状態で育つ。後に父親が革命軍総司令官のドラゴンだと知るが(第45巻 第431話)、78巻現在に至るまで直接の面識は一度もない。またルフィの母親にいたっては作品中一度も言及されていない。同様に、ルフィだけでなく彼の海賊仲間である「麦わらの一味」のメンバー全員が、戦争孤児であったり親に捨てられた過去を持っていたり、あるいは両親についての記述が全くない等、親不在の状況下にある。⁷ルフィの幼馴染のサボの「おれは親がいても“一人”だった」(第60巻 第585話)という言葉は、『ONE PIECE』においては主要登場人物が親の庇護下になんかということ逆説的に暗示しているといえる。

次に「主人公の成長」についてであるが、『宝島』の冒頭のジムは、ビルに聞かされた“a seafaring man with one leg”(6)の悪夢に怯える子供であり、船で出発した後もトリローニのキャビンボーイという立場でしかない。しかし宝島上陸直前にリング樽の中でシルヴァーの悪巧みを盗み聞きして以降、機転を利かせた行動をとったり、海賊相手に一人前の働きを見せるなど、次第に大人たちから対等に扱われるまでに成長する。また、海賊たちの囚われの身となったジムは、リヴジーの“Jump! One jump, and you’re out, and we’ll run for it like antelopes.”(262)という誘いを、シルヴァーとの約束を理由にきっぱりと断る。以前のような、“a seafaring man with one leg”の悪夢にうなされるだけの小心な少年ジムであれば、おそらくシルヴァーとの約束など気にせず一目散に医者と共に逃げたであろう。精神的な強さを獲得したジムに対して、後ほどリヴジーは“Every step, it’s you that saves our lives”(262)と、同等の立場にいる一人の仲間として称賛している。フリントの遺した宝を目の当たりにした時の、ジムの感慨に満ちた“*How many it had cost in the amassing, what blood and sorrow, what good ships scuttled on*

the deep, what brave men walking the plank blindfold, what shot of cannon, what shame and lies and cruelty, perhaps no man alive could tell.” (290) という述懐もまた、彼がもはや宝の地図を眺めては一攫千金を夢想していた無邪気な少年ではなく、人間の欲望や裏切りを経験した結果、精神的な成長を遂げたことを示していると考えられる。

それでは『ONE PIECE』のルフィの成長はどうであろうか。ルフィは常に楽観的な自信家であり、一見したところ自らを省みることによって導かれる「人間的成長」とは縁がないように思われるが、実際には物語を通して身体的にも精神的にも大きく成長している。ルフィは7歳のときに「ゴムゴムの実」という悪魔の実を食べたために、全身ゴム状のゴム人間となった。身体的成長としては、数々の強敵に出会い勝利と敗北を経験していくなかで、そのゴム人間という能力を生かして自分の戦闘能力を「ギアセカンド」、「ギアサード」、「ギアフォース」と高めていく方法を編み出したり、2年間仲間と離れて修行し「覇気」という力を身に付ける等、未来の海賊王になるべく身体的に著しい成長を遂げている。一方、ルフィの精神的な成長は、彼が衝撃的な挫折感や喪失感を味わった後に見られるものである。バースロミュー・くまによって「麦わらの一味」の仲間たちが、自分の目の前で一人また一人と消され（飛ばされ）てしまったとき、ルフィは「…………仲間ひとりも…………!!! 救えな……いっ…………!!!」（第53巻第513話）と、絶望感に襲われながら泣き崩れる。これはおそらく彼が海賊になって初めて味わった挫折感、無力感であろう。この場面同様、あるいはそれ以上の喪失体験をルフィに与えるのが、彼の義兄弟エースの死である。それまでは、どんな敵でも必ず勝ってみせるという自分の強さへの絶大な自信を持っていたルフィであったが、世界最高レベルの強敵の数々を前に、手も足も出ないまま目の前でエースを失ってしまうのである。「何が……海賊王だ……!!!」「俺は!!!! 弱い!!!!」（第60巻第589話）と、自分の弱さや未熟さを痛感し打ちのめされて叫ぶルフィの姿は、普段の自信満々で楽観的な姿からは想像もできない悲痛なものである。益子洋人が指摘し

ているように、喪失体験による一連の「悲嘆反応」(68)は、その悲しみを乗り越えるために必要なプロセスである。こうした大きな挫折体験や喪失体験を経験しそれらを乗り越えることで、ルフィは精神的にもさらに大きく強く成長しているといえるであろう。⁸

「自立する主人公」の特徴として最後に挙げられるのが、「仲間の存在」である。幼年文学を除くと、児童文学の世界では主人公はひとりではなく仲間とともに活躍する傾向にある。『宝島』のジムにとっての仲間は、海賊グループと対峙することとなる医者のリヴジーや地主のトリローニたち“faithful hands”(104)である。水間千恵が指摘しているように、ジムは自分以外は全員大人という状況で活躍し成長を遂げるものの、冒険の成功はジム一人の手柄ではない(1)。実際に宝を見つけるのは後に仲間となったベン・ガンであり、すでに宝は何者かによって奪われた後だということを知って逆上した海賊たちから、危機一髪でジムを救いだすのもリヴジーをはじめとする彼の仲間たちである。ジム自身常に「仲間の存在」を意識しており、だからこそ、負傷した仲間を置き去りにするという過失を犯した自分を“[Y]ou might spare me. I have blamed myself enough”(261)と深く恥じ、医者に謝罪するのである。

ジム同様、『ONE PIECE』のルフィも「麦わらの一味」という個性豊かな「仲間の存在」なしでは何もできないうえに、彼自身がそれをよく自覚している。「俺は剣術を使えねえんだ コノヤロー!!!」「航海術も持ってねえし!!!」「料理も作れねえし!!!」「ウソもつけねえ!!!」「おれは助けてもらわねえと生きていけねえ自信がある!!!」(第10巻 第90話)というルフィの言葉は、『ONE PIECE』の名言のひとつとして度々引用されているが(『朝日新聞』2015年1月1日朝刊)、彼は自分がどれほど強くても、仲間の存在がなければ海賊王になるという夢をかなえることなどできないとはっきり自覚している。ルフィは船長ではあるものの、「麦わらの一味」のメンバーを上下関係のある自分の手下や子分とは考えず、彼らを常に「仲間」と考えているのである。

2. 3. 行きてのち帰る物語型式

児童文学の三つ目の特徴は「行きてのち帰る物語型式」である。これは物語の主人公があるところへ出かけていき、やがて戻ってくるというパターンのことである。このパターンは、現実世界での旅や、ファンタジーに見られるような実世界から異世界に行き帰ってくる、あるいはもっと広い意味で、ある出来事の始まりと終わりということを指す場合もある。⁹ さらに冒険小説においては、主人公が未知の冒険の旅に出かけ、最後には輝かしい成功を手に戻ってくるというのが一種の常套となっている。例えば『宝島』では、ジムは母親の元を離れて宝島に向かい、数々の戦いや冒険の後、財宝を手に戻国する。先述のとおり、母親は冒頭以降は登場しないため、ジムが母親の元に戻ったか否かという点は定かではないが、少なくとも仲間と共にプリストルに戻ったことは確かである。

一方、作品がいまだ連載中の『ONE PIECE』に関しては、「ハッピーエンド」同様に、「行きてのち帰る物語型式」という点についても結論を下すことは難しい。しかし、ルフィ達一向の航路を考慮すると、いずれ彼らが元の場所に戻ってくるということは明白である。「麦わらの一味」が目指すのは、「ワンピース」が眠るといわれる伝説の島ラフテルである。そしてラフテルは彼らが進む「偉大なる航路（グランドライン）」と呼ばれる、世界を一周する航路の最終地点にある。つまりルフィたちの旅ははるか宇宙のかなたに行き再び元の世界へ戻ってくるというものではなく、世界をぐるりと一周するという類のものなので、作品の冒頭から設定されている最終目的地にルフィたち一行が到達すれば、地理的に考えて、「行きてのち帰る物語型式」に則った作品となるのは必然である。ちなみに、一旦人気が出た漫画は、人気なくなるまであるいは作者のモチベーションが続く限り連載が続くことがあるが、本作品の場合は、当初から旅の構造がシンプルで旅の目的地にぶれがないため、読者はルフィ達一行がグランドラインを進みながら少しずつ目的地に近づいている、あるいは元の場所に戻りつつあることを実感しながら読み進めることができる。

2. 4. その他の類似点：「繰り返しの法則」と対象読者や主人公の年齢層

児童文学における三つの基本的特徴以外にも、『ONE PIECE』と児童文学作品との注目すべき類似点を指摘することができる。リアリズムを迫及する文学作品では、同じ言葉やフレーズの繰り返しは稚拙な表現とみなされかねないが、その一方で昔話には「繰り返しの法則」があり、話に区切りをつけたり（リ्यूティー 64）、「既知（きち）のものとの再会の喜び」（小澤110）を読者に与える効果があるとされている。昔話と児童文学の共通性については広く認識されており、この「繰り返しの法則」についても、児童文学作品においてしばしばフレーズやエピソードなどが効果的に繰り返されている。¹⁰『宝島』において度々繰り返されるフレーズとしては、“Fifteen men on the dead man’s chest — Yo-ho-ho, and a bottle of rum!” (3) と “Pieces of eight! pieces of eight! pieces of eight!” (85) の二つを挙げることができる。前者はビルがよく歌っていた海賊の歌で、シルヴァーが正体を現す前に船の上で他の船員たちと歌ったり (81)、物語の最後にジムが回想する場面でもこれに続く歌詞が言及されている (297)。また後者は、シルヴァーが飼っていたオウムの口癖で、このスペイン銀貨についてのフレーズも、ジムが海賊に捕まる場面 (231) や物語の最後 (298) 等で繰り返し使われている。海賊が好んで飲んだラム酒 “a bottle of rum” や、海賊の掛け声である “yo-ho-ho”、カリブ海で使用されていたスペインの銀貨 “pieces of eight” などの海賊に関係のある用語の繰り返しによって、海賊という作品のモチーフを読者に効果的に伝えているといえる。

『ONE PIECE』のプロット展開においても、この「繰り返しの法則」を見出すことができる。ひとつのエピソードや戦いの後には、必ず仲間との楽しい宴と島の住人たちが出航を見送る場面が描かれている。これは作者が意図的にパターン化して描いているということであるが（福井 55）、この繰り返しによって、昔話と同様に、ひとつのエピソードに明確な区切りをつけたり、パターン化されたプロット展開による安心感を読者に与える効果がある。また、作品中何度も繰り返される「おれは海賊王になる!!!」と

いうルフィの決め台詞には、ルフィの旅の目的が確固たるものであることを読者に確信させる効果があると考えられる。¹¹

その他、児童文学作品と『ONE PIECE』の共通点として、対象読者や主人公の年齢層を上げることができる。一般的に児童文学が対象とする読者層は子供や青少年であり、主人公もまた子供あるいは青少年となっている。『宝島』について言えば、もともとスティーブソンは当時12歳の義理の息子ロイドのためにこの作品を書き始めたため (Hammond 33)、作品の対象読者は子供である。またジムの年齢についても、彼以外の登場人物は全員大人であるものの、少なくとも主人公であるジム自身は少年として設定されている。同様に、『ONE PIECE』が対象とする読者層や主人公の年齢も、児童文学のそれと重なっていると言える。対象読者の年齢については、作者である尾田栄一郎が、常に15歳の少年を対象読者としていると明言している (猪野 31)。またルフィの年齢については、第1巻では17歳、第61巻から始まる新世界編では19歳とやや年長の設定となっているものの、彼の精神年齢は実年齢よりもかなり幼く描かれている。ルフィのキャラクター造形について、尾田栄一郎自身、「・・・[ルフィが] その後に子どもたちと一緒にあって『ばーか!!』って言った。そのときはじめて気がきました。『あ、ルフィってこどもなんだ』って (笑)。・・・ルフィはボクの想像する子どもを描けばいいんだと・・・・・・・・」 (岩岡 102) と述べていることから明らかなように、ルフィの精神年齢は作者によって意図的に、対象読者と同じ15歳かあるいはそれ以下として描かれているのである。

3 『ONE PIECE』と『宝島』の共通点と相違点

以上、『宝島』を例に挙げながら、『ONE PIECE』における児童文学作品全般との類似点を検討した。次に比較対象を『宝島』に限定して、『ONE PIECE』との共通点や相違点を考察する。

3. 1. 大海賊の遺した宝

両作品に共通する特徴のひとつに、今は亡き大海賊の残した財宝を探すというテーマがある。『宝島』の場合は、目指す宝は大海賊フrintが宝島に隠した財宝、そして『ONE PIECE』の場合は、かつての海賊王ゴールド・ロジャーが遺したという伝説の大秘宝「ワンピース」である。実は海賊が遺した宝というテーマはスティーブソン¹²の創作ではなく、例えば17世紀の実在の海賊ウィリアム・キッド (William Kid, 1645-1701) の財宝についての逸話は当時からよく知られており、多くの作家に影響を与えたとされている。スティーブソンは『宝島』を通して、海賊が遺した財宝を探すというテーマを後世に広めたと言える。

3. 2. 自由奔放な主人公

主人公の性格描写に関しても、『宝島』のジムと『ONE PIECE』のルフィの間に、好奇心旺盛で自由奔放であるという共通点を見出すことができる。

ジムの好奇心の強さや自由奔放さは、仲間の大人たちに何も告げずに海賊にまぎれて一人宝島に上陸してしまうという行動や、海賊との戦いの後、味方のいる小屋を一人で勝手に出て行くといった行動に示されている。こうしたジムの突飛な行動は、結果的には仲間の成功につながることになるものの、ジム自身が“mad notions” (114)、“I was fool, if you like, and certainly I was going to do a foolish, over-bold act” (185)と認めているように、その行動は大人の目には理解しがたい無鉄砲なものに映る。スティーブソンは1878年に出版された“Child’s Play”というエッセイにおいて、大人が決して興味をもたないであろう事物に強い好奇心を示す子供の様子について、以下のように述べている：

A Vague, faint, abiding wonderment possesses them. Here and there some specially remarkable circumstance, such as a water-cart or a guardsman, fairly

penetrated into the seat of thought and calls them, for half a moment, out of themselves; and you may see them, still towed forward sideways by the inexorable nurse as by a sort of destiny, but still staring at the bright object in their wake. (Norquay 32)

ステイーブンソンにとって、好奇心こそ子供の行動の源であり、ジムは彼の子供像を体現する主人公として描かれていると考えられる。

ジムと同じように、あるいはそれ以上にルフィは好奇心旺盛で自由奔放である。船長という責任の重い立場にありながら、彼は義務や秩序にとらわれることなく、常に自らの好奇心の赴くままに無鉄砲に行動し、仲間に迷惑をかけることもしばしばである。例えば、出港の時間までに必ず戻ると仲間たちに約束して戦いに出かけたルフィが、遅れて戻ってきた理由は、途中の森で見つけた珍しい昆虫を捕まえようとしていたためであった(第25巻 第235話)。また海賊王ロジャーの副船長であったレイリーに、「キミにこの強固な海を支配できるか」(第52巻 第507話)と問われたとき、ルフィは、「支配なんかしねェよ この海で一番自由なやつが 海賊王だ!」(第52巻 第507話)と即答する。このルフィの言葉が彼の自由さを端的に物語っていると言えるであろう。このように、自分勝手な行動と紙一重で「自由」を求め、好奇心旺盛に動きまわる船長に、仲間たちは「ルフィだから仕方ないわ」(第52巻 第503話)と時に苦笑いしながらも、いざというときには全幅の信頼を寄せ共に冒険の旅を続けているのである。

3. 3. 教訓的メッセージの欠如

『宝島』と『ONE PIECE』の共通点として注目すべきもう一つの点は、両作品とも作者による教訓的メッセージが加えられていないということである。『宝島』が出版された19世紀には、ステイーブンソンが『宝島』の序文の詩で作品執筆の手本にしたと述べているキングストン (W. H. G. Kingston, 1814-1880) やバランタイン (R. M. Ballantyne, 1825-1894) らがす

でに冒険小説の数々を生み出していた。しかし、これらの作品にはヴィクトリア朝の帝国主義的なイギリスの社会情勢を反映して、愛国心や道徳性などのメッセージが込められる傾向にあった。(水間 5)。猪熊葉子・神宮輝夫が指摘しているように、「『宝島』はこの教訓的なかせを取り除いて、本来の冒険物語を完成した」(131)と言える。登場人物たちは、一応ジムたち紳士グループと海賊グループに分かれてはいるものの、そもそもジムたちが目指す宝は大海賊フリントが強奪したものである。それを見つけ出し自分たちのものにしようとするのは、実際のところ無法者たち海賊グループの行動と同種のもので、そこに道徳性や教訓性は見出せない。『宝島』の魅力のひとつは、この教訓的メッセージの欠如であると言えるであろう。

一方『ONE PIECE』では、人種差別問題や国家権力の問題、戦争の狂気など、現代社会に通じる様々な話題が取り上げられている。「悪」である海賊を取り締まる海軍の制服に大きく「正義」と書かれているが、海軍の正義は絶対的なものではなく、置かれた状況次第で「正義」にも「悪」にも成り得る複雑なものとして描かれている。しかしながら、作者自身はこれらのテーマをプロットの背景として提供するだけで、かねてより「メッセージと呼ばれるものは作品に入れたい」(猪野 47)と公言している。したがって、『ONE PIECE』も『宝島』と同じく、作者によって意図的に込められたメッセージ性はないといえる。

3. 4. 海賊のモチーフ

海賊関連のモチーフについては、『宝島』に限らず、海賊が登場するどの作品においても頻繁に用いられているが、これらもやはり少し修正や変更を加えられながら、『ONE PIECE』においても登場している。例としては、ドクロのマークの海賊旗「ジョリー・ロジャー」、刀傷のある頬、一本脚の海賊、海賊の歌、海賊料理人等を挙げることができる。しかしながら、こうした一般的な海賊のモチーフや小道具は、ステイブソン自身が借り

物として認めているように(高桑 75)、『宝島』と『ONE PIECE』に限ったものではなく、海賊を扱う作品の多くに見られるものなので、共通点として考察するのではなく、どちらも海賊物語の伝統から逸脱していないと判断する要素としてとらえるのが適切であろう。

3. 5. 『ONE PIECE』と『宝島』との相違点

次に、『ONE PIECE』と『宝島』との注目すべき相違点を以下の表1にまとめた。

表1 『ONE PIECE』と『宝島』の相違点

	『ONE PIECE』	『宝島』
主人公の地位、血筋	海賊船の船長。ガープの孫、ドラゴンの息子	キャビンボーイ。宿屋の息子
冒険に出る経緯	自発的	成り行き
細部の描写	細部まで詳しく描写	簡潔な描写
女性登場人物の数	多数	ほとんどなし

『ONE PIECE』のルフィの地位は、「麦わらの一味」と呼ばれる海賊団を率いる船長というものである。また親不在の状況で育ったとはいえ、彼には海軍の英雄ガープの孫でありかつ革命軍総司令官ドラゴンの息子という、恵まれた血筋が設定されている。『ONE PIECE』は、身分も名もない一介の少年が活躍するという物語ではなく、むしろ最初から血筋を含めてすべてにおいて常軌を逸した大人物が海賊王になるまでの物語、として読むことができるであろう。一方『宝島』のジムは、港町のしがない宿屋の息子で、彼の血筋や身分にはこれといった特徴があるわけではない。またヒスパニオーラ号における地位にしても、船長付きキャビンボーイという立場でしかないため、立派な地位が最初から設定されているルフィとは大きく異なっているといえる。また冒険に出る経緯についても、ルフィは幼少の頃より海賊船の船長になることが夢であり、17歳で自発的に船出するのに

対し、ジムの場合はひよんなことから宝島の地図を手に入れたために、成り行きで宝探しの冒険に参加することになるという違いがみられる。

物語描写の手法についても、二つの作品の間には大きな違いが見られる。『ONE PIECE』では、一つ一つのエピソードや登場人物の心理描写が非常に詳細に描かれており、プロット展開に全く関係のない登場人物の衣服の柄にいたるまで、作者は何らかの意味を込めているようである。¹³ 一方『宝島』については、夏目漱石(夏目金之助)が「西洋ではスチヴンソン(Stevenson)の文が一番好きだ。力があって、簡潔で、くどくどしい処がない、女々しい処がない」(153)と称賛しているように、細部描写を切り落とした簡潔で歯切れのよい物語描写が、本作品の特徴であり長所でもある。

興味深いことに、女性登場人物の数や扱いにおいても両作品は大きく異なっている。『ONE PIECE』は少年読者を対象とした漫画であるにもかかわらず、女性登場人物の数が非常に多い。仲間であっても敵であっても、常に女性が大きな存在感を示している。また従来の少年漫画で扱われているような男性に守られるべきか弱い女性よりも、むしろ身体的にも精神的にも強い女性の方が多く登場する。作品中の「女の子だって強くなくちゃいけない!!」(第9巻 第79話)や「おんなを“弱者”と思い・・・!! 戦いに手を抜き!! とどめも刺さないあなたに敗けはなくとも勝ち目もない!!!!」(第69巻 第687話)という言葉からも明らかなように、『ONE PIECE』はフェミニズムの見地に立った女性像を描く作品ということができであろう。その意味では、『宝島』は対照的である。作品中に登場する女性はジムの母親ただ一人であり、死んだビルの金貨を数える場面以外は特に個性を感じさせることもなく描かれ、先述のように作品冒頭で登場するのみである。シルヴァーの妻は登場することはないものの、同じく金銭についてシルヴァーが話をする場面で一度言及されていることは興味深い。実はこのように女性が排除されている作品はスティーブソンに限ったことではなく、男性集団の絆を強調することは、ヴィクトリア朝時代の冒険小説に共通する文

学的傾向であった(伊達 77)。

以上のように『ONE PIECE』と『宝島』の間には、多くの共通点があると同時に、興味深い相違点もいくつか指摘することができる。¹⁴

おわりに

本論では、児童文学という視点から、『ONE PIECE』に見られる児童文学作品の伝統的特徴との共通点に注目し、『宝島』との共通点や相違点についての考察を試みた。児童文学作品との共通点として検討した項目は、「ハッピーエンド」「自立する主人公」「行きてのち帰る物語型式」という児童文学作品の基本的要素に加え、「繰り返しの法則」や「対象読者や主人公の年齢層」という点である。このうちの「ハッピーエンド」と「行きてのち帰る物語型式」という二点については、『ONE PIECE』が未完ということで、現時点で結論を下すことは不可能であるものの、これまでの物語の流れや作品における地理的条件等を考えると、おそらく本作品も児童文学のパターンに則ったものになるであろうと推測することができる。さらに比較対象を『宝島』に限った場合、両作品の間にはいくつかの相違点は別として、「大海賊の遺した宝」「自由奔放な主人公」「教訓的メッセージの欠如」「海賊のモチーフ」など、さらに多くの共通点があることが明らかになった。

現代日本のサブカルチャーを代表する『ONE PIECE』と児童文学作品との間に、また19世紀イギリスで書かれた古典的冒険小説との間に、このように多くの類似点や共通点があるということは、一体何を意味しているのであろうか。筆者は、これらの共通点にこそ『ONE PIECE』の人気の秘密があると考えている。つまり、時代や国、作品形態にかかわらず、子供の読者がおもしろいと感じる作品には常に共通した特徴があるということである。尾田栄一郎が新聞のインタビュー記事において、『ONE PIECE』は少年マンガの王道であり、少年マンガの王道とは「冒険なんだ、旅だ、仲間なんだ」(『朝日新聞』1999年11月26日夕刊)と語っている。この「冒険」「旅」「仲

間」は、130年以上前に『宝島』が書かれてからずっと子供たちの心をとらえ続けてきた、冒険小説の王道を行くテーマである。『ONE PIECE』が奇をてらったテーマではなく、あえて児童文学の古典的名作と共通するテーマを真正面から扱っているところに、この作品の成功の鍵であり魅力の一端があると考えられる。

(本論は、2014年度日本イギリス児童文学会中部支部秋の例会における口頭発表の内容に加筆修正したものである。)

註

- 1 「海洋法に関する国際連合条約」は、海賊行為の定義や海賊船舶又は海賊航空機の拿捕について細かく定めている。 <<http://www.houko.com/00/05/H08/006.HTM>>
- 2 2013年度の本屋大賞受賞作品は『海賊とよばれた男』、そして2014年度は『村上海賊の娘』である。これらの人気小説の作品タイトルに「海賊」という言葉が使用されていることは、海賊のイメージを考察するうえで興味深い。
- 3 児童文学とは何かという児童文学の定義そのものを考えることは、本論の扱う範囲外であるため、ここでは児童文学作品に共通する一般的な特徴を概観している。
- 4 『宝島』のエンディングが大枠においてハッピーエンドであるということに異論はないと考えられるが、最後にジムが“Oxen and wain-ropes would not bring me back again to that accursed island” (298) とメランコリックに自分たちの冒険について述懐しているように、主人公の精神的な成長という面を考慮すると、単純な大団円とは言い難い。
- 5 インターネット上には『ONE PIECE』の最終回を予想する多数の考察サイトがあるが、その大多数が尾田栄一郎がたびたびインタビューなどで子どもたちに夢をあたえたいと述べていることから、結末はハッピーエンドとなると予想している。
- 6 青木由紀子は児童文学作品には孤児を主人公にした作品が多いことを指摘している。主人公が孤児の場合は、両親はあらかじめ物語から排除されている (1)。

- 7 尾田栄一郎は、読者から『ONE PIECE』において母が不明であったり既に死亡している登場人物が多い理由を問われ、「『冒険』の対義語が『母』だから」(第78巻 第779話「SBS 質問コーナー」)と答えている。作者は冒険少年漫画と「母親」は相容れないものと考え、意図的に主人公たちを親不在にしていると考えられる。
- 8 安田雪は、ルフィの逆境に打ち負かされない強さは発達心理学上の「レジリエンス」にあたり、彼が「レジリエンス」を体現していると述べている(92)。
- 9 斉藤次郎は『行きて帰りし物語』の序文において、読書行為そのものが日常から非日常への「行きて帰りし物語」体験であると述べている(ii)。
- 10 新居明子はルイス・サッカー(Louis Sachar, 1954-)の『穴』(*Holes*, 2000)において、主人公の成長を効果的に示すために繰り返しの手法が用いられていると指摘している(91)。
- 11 ルフィの「俺は海賊王になる!!!」という言葉は、「俺は海賊王になる男だ」等の変化型も含めると、78巻中27回繰り返されている。
- 12 ウィリアム・キッドの財宝については、2015年5月にマダガスカル島近海で、キッドの財宝と見られる銀の延べ棒50キロが沈没船から見つかり話題となっている。(『朝日新聞デジタル』2015年6月4日 <<http://www.asahi.com/articles/ASH6373DSH63UHBI03M.html>>)
- 13 『ONE PIECE』の細部描写について、岸博美は「一見ささいなこと」にまでこだわりを持って描かれている点が、伏線の読み解きや作者の遊び心を楽しむという意味で、読者の心をつかむと述べている(16)。
- 14 『ONE PIECE』と『宝島』の相違点を詳細に検討することは本論の論点から外れるため、ここでは違いを指摘するのみとする。しかしながら国や時代、漫画と小説と言う作品形態の違いを含めて二作品の違いを詳しく検討することは、『ONE PIECE』をより深く理解する上で重要であると考えられるため、今後の課題としたい。

引用文献

- Hammond, J. R. *A Robert Louis Stevenson Chronology*. London : Macmillan Press, 1997.
- Norquay, Glenda, ed. *R. L. Stevenson on Fiction : An Anthology of Literary and Critical Essays*. Edinburgh : Edinburgh University Press, 1999.
- Sachar, Louis. *Holes*. New York : Random House Children's Books, 2000.
- Stevenson, R. L. *Treasure Island*. London : Penguin Books, 1994.

- Tolkin, J. R. R. *The Hobbit, or There and Back Again*. London : Grafton, 1991.
- 青木由紀子『七つのテーマから読み解く 英米児童文学』京都：ミネルヴァ書房、2009.
- 阿部美穂『モンキー・D・ルフィの「D」はドラッカーだった』東京：経済界、2011.
- 安藤みゆき「『ONE PIECE』に描かれるレジリエンス」『筑波女子短期大学紀要』40 (2013) : 100-87.
- 猪野辰「ODA EICHIRO×SAKURAI KAZUTOSHI 碇を上げ、帆を揚げよ」『Switch』27.12 (2009) : 27-47.
- 猪熊葉子・神宮輝夫『イギリス児童文学の作家たち：ファンタジーとリアリズム』東京：研究社、1975.
- 岩岡寿衛「すべては一枚の落書きから始まる：尾田栄一郎ロングインタビュー」『オモ!』1 (2003) : 99-103.
- 岩尾竜太郎「浮遊する逸脱少年ジム：『宝島』講義上」『みすず』40.12 (1998) : 21-32.
- 小澤俊夫『昔ばなしとは何か』東京：大和書房、1983.
- 小野田哲弥「“悪魔の実”で読み解く『ONE PIECE』のメガヒット要因」『産業能率大学紀要』34.1 (2013) : 1-19.
- 岸博美「ONE PIECE論：独自性と位置づけ」『ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会』13 (2011) : 15-24.
- 斉藤次郎『行きて帰りし物語：キーワードで解く絵本・児童文学』東京：日本エディターズスクール出版部、2006.
- 高桑啓介「スティーヴンソン考 第一部：冒険小説『宝島』を中心に」『立教女学院短期大学紀要』1 (1969) : 61-87.
- 伊達桃子「『宝島』：冒険物語の金字塔」『英米児童文学ガイド：作品と理論』日本イギリス児童文学学会編、東京：研究社、2001. 75-83.
- 谷本誠剛『児童文学とは何か：物語の成立と展開』東京：中教出版、1990.
- 夏目金之助「予の愛読書」『漱石全集』第25巻、東京：岩波書店、1967. 153-155.
- 新居明子「Louis SacharのHolesにおける主人公Stanleyの成長と『自己肯定感』」『英語圏児童文学研究：TINKER BELL』57 (2012) : 85-97.
- 平居謙「旧約聖書『ルツ記』と漫画『ONE PIECE』：芸術観光学の理論と実践⑤」『平安女学院大学研究年報』13 (2013) : 10-18.
- 百田尚樹『海賊とよばれた男』東京：講談社、2012.

福井洋平「『ONE PIECE』 作者インタビュー：海賊ビッケが冒険漫画の原点」
『AERA 12月21日号』（2009）：54-55.

益子洋人「アニメに学ぶ悲しみの乗り越え方：『ONE PIECE』『鋼の錬金術師』を
題材として」『児童心理』65.17（2011）：66-71.

水間千恵「*Treasure Island*における反体制への挑戦：逸脱する英雄像」『多元文化』
2（2002）：1-12.

室伏哲郎『大追跡！現代の海賊』東京：宝島社、2000.

安田雪『ルフィの仲間力』東京：アスコム、2012.

リューティ、マックス『昔話の本質：むかしむかしあるところに』野村滋訳 東
京：福音館書店、1974.

和田竜『村上海賊の娘 上・下巻』東京：新潮社、2013.

Appendices

Appendix A: 海賊に関するアンケート（小学生1年生～4年生対象）

ほうかこ こ きょうしつ
放課後子ども教室のみなさんへ

たからじま すていーぶん せん さく しら
『宝島』（ステイブンスン・作）について調べています。
あんけーと てつだ
アンケートのお手伝いをお願いします。

1. かいぞく し
海賊を知っていますか。

（「はい」「いいえ」のどちらかに丸をつけてください。）

[はい いいえ]

「はい」を選んだ人は、下の2番と3番もお願いします。

「いいえ」を選んだ人は、これでおしまいです。

2. 「かいぞく き おも
海賊」と聞くとどう思いますか。思ったことをひとつ書いてください。

(つよい、こわい、かっこいい、たからもの、おかね、わるもの、せいぎのみかた、じゅう、たたかい、など)

[]

3. 「海賊」の名前をひとつ書いてください。名前がわからない場合は、「わからない」と書いてください。

[]

ありがとうございました！！

Appendix B: 海賊に関するアンケート (大学1、2年生対象)

イギリス児童文学作品の『宝島』(Treasure Island)について、学会発表する予定です。以下の二つの項目についてのアンケートにご協力ください。

1. 海賊のイメージを一語(日本語)で表現してください。

()

2. 海賊で思い浮かぶ人物を一人挙げてください。(实在、フィクションを問いません。)

()

Thank you very much!

Appendix C: アンケート結果

★放課後子ども教室に参加する小学1年生から4年生88名

1. 海賊を知っていますか。(n=88)

はい	いいえ
78	10

2. 「海賊」と聞くどう思いますか。思ったことをひとつ書いてください。(n=78)

(つよい、こわい、かっこいい、たからもの、おかね、わるもの、せいぎのみかた、じゆう、たたかい、など)

たたかい	かっこいい	つよい	たからもの	ふなたび	せいぎのみかた	計	こわい	わるもの	計	その他	無回答
15	15	10	3	3	2	48	7	4	11	3	16

3. 海賊の名前をひとつ書いてください。名前がわからない場合は、「わからない」と書いてください。(n=78)

ルフィー	ジャック・スバロウ	フック船長	わからない	無回答
24	8	5	21	20

★大学1年生、2年生163名

1. 海賊のイメージを一語(日本語)で表現してください。(n=163)

財宝	船・海	冒険	自由	豪快	かっこいい	ワンピース	強い、勇敢	夢	良い人	仲間	陽気	信念	バイレーツ、 オブ・カリビアン	豪華	計
17	14	13	9	12	7	7	6	3	3	2	2	2	2	1	100
危険・怖い	海の泥棒	野蛮・汚い	極悪	路拳	計	その他 ^{*1}									
18	8	7	6	2	41	22	*1: 謎、術、技、黒、ヨーホーホ、眼帯、ひげ、ドクロ、続々、等								

2. 海賊で思い浮かぶ人物を一人挙げてください。(実在、フィクションを問いません。)(n=163)

ルフィー等	ジャック・スバロウ	フック船長	シルヴァー	その他 ^{*2}	無回答
56	78	18	1	8	2

*2: キッド、キャプテン・フィリップ、平清盛、ゴークイレッド、等